



37
「化」

「仮装」という言葉には、衣装を着て、ふだんの自分とは違うものになりきるという意味がある。

案外、人生そのものがそんなものではないだろうか。スーツや制服を身にまとい、「それっぽい顔」をして生きている。

その“仮装”が社会生活を送る上で助けになることもある。ふと「本当の自分って何だろう」と不安になる瞬間もある。よくもわるくも、ほとんどの人が日常的に仮装しているのだと思う。

本来の起源や文化的な背景はさておき、この日本でハロウィーンが大人も子どもも関係なく盛り上がるのは、そんな「日々の仮装」を、堂々と、そして楽しげにできる日だからかもしれない。誰もが自分の「役」を脱ぎ捨て、別の姿で街を歩くことができる。その光景は、仮のものであるからこそ刹那的で、儚い魅力を漂わせる。

僕にも、忘れられないハロウィーンがある。

いつかの秋、妖しくも美しい世界へいざなう列車に乗ることになった。僕はそこで何万人もの“美しい人間たち”に出会った。

夕暮れ時から始まったそのパーティーはたいへんな盛り上がりで、だれもかれも自分の姿が「仮装」なのかどうか、

もはや気にもとめないほどに熱中していた。みんなとても楽しそうだった。妖しく美しい、どこか別の世界に連れて行かれてしまうかもしれないというのに――

気づけば辺りはすっかり暗くなり、身にまとった衣装のきらめきが闇夜に溶けていった。あれは夢だったのか、それとももうひとつの現実だったのか、僕にはわからない。でも、まだあの物語は終わっていないような気がする。

ただ、ひとつ言えることがある。

何かを演じていても、

間違はなくそれは自分なのだから。

好きなものに、とことんやりきるべきだ。

ハッピーハロウィン！